

社会科の研究について

市川 洋二

社会科が目指す「子供が学びをつくる姿」

詳しくは目指す子供の姿シートへ

これまでの2年間の研究を生かし、今年度社会科では「子供が学びをつくる」姿を下記のように設定しました。また、この姿を実現するための支援を整理しました。

【課題設定】

子供の姿 日常生活の中での出来事や調査活動、写真やグラフなどの具体的資料を基に、社会的事象の見方・考え方を働かせ、分析的に考察し、問題意識や課題解決への見通しをもつ。

支援 社会的事象について問題意識をもったり、課題を把握したりできるように、子供の生活経験との関連が深く、多様な視点から考察できる資料（市町村のHP、PR動画、生産量や人口変化のグラフ等）を基に考えたことをグループや全体で交流する活動を設定する。

【課題追究】

子供の姿 空間的な広がり、時間の経過、人々の相互関係などに着目して探究的に調べ、比較・分類したり、人々の生活と関連付けたりすることによって、総合的に考察する。課題追究の視点や方法を構想（選択・判断）し、その過程を客観的に捉えることで、学びの価値を実感したり、次の学習に生かそうとしたりする。

支援 多様な視点に着目して子供自身が探究的に学習活動を発展的に展開することができるように、課題解決の方法（ZOOM聞き取り調査、広報誌からの情報収集、オンライン情報共有ツール、地図アプリの活用等）を学び、汎用性の知識として繰り返し活用する機会を単元全体に配置する。

【パフォーマンス】

子供の姿 社会的事象の意味や特色について知識や概念など、多様な視点から分析し、総合的に考察してわかったことをまとめ、これからの地域社会の発展について構想（選択・判断）する。

支援 これからの北海道の発展について主体的に課題追究する態度を身に付けることができるように、具体的な資料を多様な視点に着目して課題追究し、集めた情報を、オンライン情報共有ツール（GoogleKeepのラベル機能、Padletの地図機能等）を活用して、情報や考えを対話的に共有する学習活動を設定する。

これまでの研究を通して、子供が自己をメタ認知する支援によって、子供たち自身が追究する課題を見いだしたり、学習テーマや学習計画を振り返ったりしながら、主体的に学びを進める姿が見られました。今年度は、子供が他者ととともに自己調整したことを基に、知識・理解を深め、地域社会のよりよい発展について構想（選択・判断）する支援について研究を進めてきました。

社会科研究実践における子供の「自己調整」

詳しくは実践指導案へ

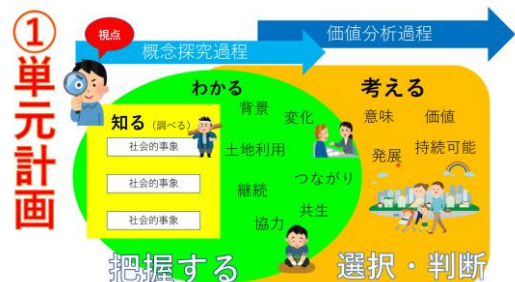
社会科の研究実践「北海道のまちづくり」では、子供の「自己調整」の姿を下記のように構想し、授業実践に取り組みました。

	課題解決の見通し	学習経験を生かす	省察
自己調整の実践における	まちづくりの特色を調べる。 着目する視点と学習経験を基に、まちづくりの特色や発展について調べる計画を立てる。	追究の視点を見つける・見直す まちづくりの特色について調べる学習を通して追究の視点を見いだしたり、修正したりしながら、過去の学びを今の学びに生かします。	学びの成果や価値を実感する 着目する視点を基にまちづくりの特色を捉える学習のよさや、他の学習への汎用性に気付き、これからの学びに生かそうとする。
	・ まずは視点をもとに比べてみよう、人々の思いや願いがわかるはず。どんな方法でまとめようかな。	・ 視点をもとに考え直したり、友達と交流したりすると新しいことに気付くことができるかもしれない。	・ 視点をもとに考えると、まちづくりの特徴がわかってきた。次の学習にも生かせよう。

社会科「北海道のまちづくり」研究実践について

第4学年「北海道のまちづくり」の研究実践では、研究主題「一人一人の子供が他者ととともに自己調整する学び」を実現する手立てとして、①単元計画の工夫、②ラベリングの支援を行いました。

①**単元計画の工夫**：単元の学習計画を大きく2つの学習過程に分けて単元計画を作成しました。（図1）単元前半は「土地」「時間」「人・関係」など追究の視点に着目し、社会的事象に関する知識（事実に基づく知識：社会的事象の相互の関係性、一般化、法則化された知識等）を習得する学習過程、単元後半ではそれらを比較、関連付けることによって地域社会の発展について構想（選択・判断）し、意思決定された知識（価値関



係的知識)へと高める学習過程として位置付けています。

本実践では「北海道のまちづくり」を大単元として、小単元に「旭川市の地場産業」「ニセコ町の国際交流」「斜里町の自然」などの特色を生かしたまちづくりを題材としています。北海道のまちづくりについて興味をもって調べ、その特色を「把握する」段階から、徐々にその意味について理解し、これからのまちづくりの発展を「考える」ことができるように単元を構成しました。

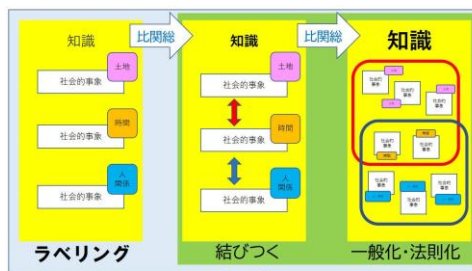


②ラベリング： 社会的事象の特色と意味を捉える視点として「ラベル(視点)の作成」という学習活動を位置付け、獲得した知識や概念間の関係や意味をより明確に把握したり、他者と共有したりするツールとして活用しました。

多様な視点に着目し、単元の導入からまとめまで学習課題を追究することによって、まちづくりの特色と人々生活との関連に気付き、その発展の在り方について自分なりに構想(選択・判断)することができるようになります。

この支援によって獲得した一つ一つの知識の精緻化と体制化を図り、まちづくりの取組や特色等の社会的事象は比較、関連付けられた汎用的な知識(事実関係的知識)として説明したり、まとめたりすることができるようになります。

また、それらの一般化・法則化された知識を基に、まちづくりの発展や持続可能性について考察する学習活動を通して、価値関係的知識へと知識は成長していくと考えています。



選択 判断 意思決定 説明 議論

子供の姿から(GIGA スクール構想との関連)



これからも国際交流のことを続けていくには
もっと日本人は外国人のことを外国人は日本人のことを知っていることが大切だということが分かった

国際交流はニセコ以外にもしているところがあるけどまだ国際交流員がニセコ町の近くのまちにいないから国際交流員がもっといるんな地域にいると外国人は助かることを知った

異文化の交流を深めるとそれぞれがお互いを理解して、より暮らしやすくなるんじゃないかと思った。

#異文化理解 #国際交流 #願い
#思い#人 #工夫 #協力 #変化 #発展

さらに本実践では、子供たち自身が作成したラベルを全体で共有し、事実関係的知識間の関係性に着目する学習活動が、他の学びや次の学習単位に関する自己効力感につながることや、その結果として学習の転移が起こりえることについても研究を進めてきました。

本実践では、「ラベリング」という学習活動に対する意欲を高め、着目する視点を自覚化し、他者と対話的に共有を図る支援として2つのオンライン情報共有ツール(Google Keep, Padlet)を活用しました。どちらもノートや振り返りカード、資料配布の役割を果たしています。このICTを活用した支援によって、子供たち一人ひとりの考えを教師と子供たちで即時的に共有できるようになり、教師が個々の学習状況を見取り、子供同士の対話的な学びを促進することができました。

Google Keepの「ラベル機能」、Padletでは「#(ハッシュタグ)」を使った記述などの学習活動を通して多様な視点に着目し、学習課題を追究することによって、しだいに子供たちは新しい事象と出会った時でも、過去の「ラベリング」を活用した学習経験をもとに適切に着目する視点を見出したり、他の事象との関連性に気付き、獲得した知識を一般化したり、新しい課題追究に活用したりしながら理解を深め、課題解決を図ることができるようになりました。

この実践を通して、子供たちは「#思い」「#願い」「#多文化共生」「#持続可能性」などのラベルを使い、社会的事象を多様な視点に着目しながらまちづくりの特色を把握し、考察することによって、その意味や価値と人々の生活との関連を見出し、一つ一つの社会的事象だけではなく総合的に選択したり、判断したりしながら視野を広げ、まちの発展のために「自分にも何かできることがある」という地域社会の一員としての自覚をもつことができるようになりました。

研究から見えたこと

本実践では「社会科の学習に関するメタ認知の要素」と「ラベルを使った学習」について小単元ごとにアンケート調査を行い、指導上の課題を修正しながら学習を進めてきました。今回の実践の成果として、子供たちが「ラベルを使った学習と自己の学習成果について一定の効果を感じている」ことや、「視点を基に他者の考えを理解できるようになったこと」などが明らかになりました。しかし、「ラベリング」を活用した学習の適切な実践の在り方と検証方法の確立ができていないことが課題として残りました。社会科における学習課題の把握と、その探究活動を深める手立てとしての有効性を、他の学習単位でも実践することや、他学年との系統性を考慮した指導計画を作成することなど、引き続き研究と実践を積み重ねていきたいと考えています。